

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 71 号

発行日 2026.03. 15
編集・発行 井上講四／堂本彰夫
※連絡先 〒901-2225 沖縄県宜野湾市 大謝名 3-13-24 教育協働研究所 ~岳陽舎~ (井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail: gakyuou17@outlook.jp

○「皇位継承」について、何が重要なのか？

とうとう、このテーマについてまで書くことになってしまった！ただし、私は、ここで、この国の「国体」の在り方そのものを、大上段に（偉そうに？）語るつもりはない！あくまでも、「天皇」を、一人の人間の生き様（人生）として捉えてみたのである！要は、偶々、その家系（皇族）の一員として生まれたばかりに、「天皇」という、まさに途轍もない人生（別言すれば役割？）を背負わされた人間の存在意義（運命？悲哀？）について、私なりに考えてみたいということである（まったくの不遜ではあるが！）！！

しかるに、現在（第2次世界大戦以降）、「天皇」は、「日本国及び日本国民統合の象徴」という建付けとなっている（憲法第一条！端的に言えば、日本国／日本国民が、一つのまとまった集団（国家／社会）であることを示す、言わば「証し」だということである（よくもこうした妙案？を考えただけである！）！だが、その「証し」は、当の本人（天皇自身）にとつては、ほとんどが、自らの意思（価値観）や権利とはかけ離れて外在化している（少なくとも、国事行為としては！）！！それとの葛藤や自らの言い分が、たとえあったとしても、基本的には、その枠（制約）から飛び出すことが出来ない、否、それが許されていないということである（自由の制限？）！！

そんな中、私が、重要だと思うのは（ある意味「畏敬」の対象と思えるのは？）、その一人の人間が、ひたすら「国家・国民」の安寧を願い、祈り、そして行脚を繰り返す、その姿なのだと思ふのである！それは、おそらく、「万世一系」とか、「血筋」を超えた、その生身の人間の生き様、それ自体なのである！それを体現する者のみが、選ばれる所以である！

○オープン戦観戦から、久方の「じのん道遙」へ？

ある意味、これもまた、一人の人間の生き様（人生模様）ということになるが、先日（2月）、春の陽気に誘われて（下半身を鍛えるためにも）、横浜FCのベイスターズと広島カープとのオープン戦（宜野湾市立野球場／ユニオン）からスタジアム宜野湾を観に行った！ただし、試合の結果はもちろん、あまりお目当ての選手もいないので（それぞれへの推しには申し訳ないが？笑、最後まで観ることなく、近くの海岸（エメラルドビーチ等）に移動した！さしずめ、久方ぶりの「じのん道遙」となったわけである？

かくて私は、そこで、とても怪しげな中老？女性（そこにいた、特に若者達に近づき、何やら、奇妙な手振りで、彼らに話しかけていた！）を目撃した！しかも、彼女は、私にも話しかけてきたのである！最初の話しかけの言葉は、残念ながら覚えていないが、少し会話してみると、彼女は、ある宗教団体の信者であり、その布教活動の一環（ボランティア活動！ノルマ？）として、出くわす人達への話しかけ（説教？）をしているということであった！

珍しく、私には気になったので（その宗教団体の名は、初めて聞くものであった！）、帰宅してから、すぐにネットで調べてみたが（ここでは団体名は伏せておく！）、かなりヤバい団体のようなであった！もちろん、思想・信教の自由ではないが、いかなる団体の宗教活動も、否定されるべきものではないが、昨今、こうした宗教団体の活動・影響は甚大なものがあり（政治にも深く関与？）、社会問題ともなっている！辛い出来事等が、そこに入るきっかけかもしれないが、末端の信者の誠実さ（無垢？）が切なく見える！！

○何が幸せなのか？「強くて豊かな日本」とは？

本当は、先号で書ければよかったのだが、もう一つ、関連で書きたいことがあった！それは、先の総選挙において、大切なことは、「カネ」でもなく、「私利私欲」でもない！「幸せ」である！そのことを、「保守」であろうが、「革新」であろうが、言わば正々堂々と、自らの政治信念として披歴して欲しかったということである（特にある急進政党？）！何故なら、総選挙は、国民が、自らそれを選択する唯一の機会であるからである（その意味で、選挙に参加しなかった人間は、自らの「幸せ選択」の権利を放棄したことになる？ただし、実際は、そうした実感は沸きづらいが？！いずれにしても、隠そうとしたり、批判し合ったり、なじったりするだけでは、何も生まれない！そういうことである！

ところで、その「幸せ」については、例えば「美しい日本」、「楽しい日本」、「強くて豊かな日本」等々、時のリーダー（内閣総理大臣）が、ある意味力強く提唱もしているが、それらは、如何せん抽象的で、情緒的な表現（目標）となっていることは否めない（決して間違いではないが！）！！そして、それらは、いわゆる「経済的な基盤」がなければ、空疎で、上滑りな叫びに終わることは明らかである！ちなみに、それ自体は、あくまでも「基盤」であって、最終ゴール（その上に築くもの）ではない！では、それは何か？やはり、それは、「幸せ」なのである！いくら物質的に豊かであっても、そこに「幸せ（感）」がなければ、何のためのそれか分からなくなる！もともと「経済」が、「経世済民」を意味するならば、それは、ある意味必然のことなのである！

そこで私は、最新（I総理）の「強くて豊かな日本」というキャッチフレーズに関わつて、その骨格を構想してみたい？どこからの圧力にも屈せず、自らの思いと努力で、生きていて（生まれつき）良かったと、各人が言える／思えるような社会（国）であるということである！それは、当然、「物の豊かさ」と共に、「心の豊かさ」が実現（保有）されているということである！厳しい現実が、そこには幾重にも横たわっていることは間違いないが、そうした思いや努力を否定する権利は、誰にもない！「強くて豊かな日本」とは、是非そういうことであつて欲しい！（井上）

オール○○について(○○ファーストに関わって?)

敢えてここで書くべきことではないのかもしれないが、ここでは、「○○ファースト」ということが、何故か脚光を浴びてきた昨今の状況の中で、ある意味その対極にあると考えられる「オール○○」について、少し考えておきたい!ただし、この「オール○○」については、私(堂本)が住む〇〇県の、県民運動のスタンス(スローガン)を強く連想させるものでもあるので、そのこととは一線を画す形で(言わば「一般論」的に?)、ここでは、その意味とあり様を述べてみたいということである!

そこで、改めて、その双方の意味とあり様を捉えてみると、そこには、ある共通点があるように思われる!それは、これまでの諸勢力(政党やそれに類する各団体等)が、その在り方を抜本的に改め、なかなか変わらない問題状況を何とか変えていきたいという強い情動(意欲)が、そこにあるということである!とにかく、このままではいけない!何か、前進(改善)を図らなければ、さらに状況は悪化(硬直化)する!そうした不安や焦りが、一気に高まったとも言えるということである!

しかし、ここには、もう一つ重要な点がある!それは、どちらも、それが向かっている先には、対抗勢力というか、自らの主張や価値観に対峙している(と感ずている)存在があるということである!だから、自らを「ファースト」とか、「オール」とかと位置付けて、それらに向かっている!ということである!

気持ちには分かるし、そうした思いの結集が、大きな力(求心力)をもつという事は明白であるが、ただここで留意すべきは、そうしたスタンス(スローガン)が、思いもよらぬところで、別の(あるいは外の)勢力(国)から、悪用(逆利用?)されることがあるということである!政治とは難しいもので、様々な勢力(国)が複雑に絡み合っていて、それを成している!だから、問題の解決に当たっては、それが、駆け引きの道具にもされるといふことである!!

〇何(ど)を、どのように見ていけばよいのか?

またしても、世界は(もちろん我が国も!)、予想だにしないことでは、「建國物語」を見てみる?その一

そこで、次に、実際に(3世積?)の、実質的な建國物語の真相を、改めて追究しておきたい!「記紀」の物語としては、神武が、九州から東征して来た時に、そこには既に、土地の豪族?「登美(長脛彦)と、彼の妹「炊屋姫」登美夜皇女を娶った「饒速日命」の勢力(物部一族)がいたという。ちなみに、その「饒速日命」の勢力(物部一族)が、ここからともなく「生駒山麓」の「峰ヶ峯(ひらね)」(交野市繁船(神社))に降臨し、その後天和に入ったともある!ある説によれば、彼らは、直接には「百備」から来たのではないかと推察されているが、(興裕)氏、しかもそれは、かの第十代「崇神天皇」に仮構されているが、もともとは、北部九州(厳密には「高良山」周辺?)からの進出だと考えられる!!

ところで、周知のように、その第十代「崇神天皇」は、不忠議にも、初代神武天皇とともに、「ハックニシラススメラミコト」(初めて国を治めた天皇)とされているが(ただし、表記漢字は違ふ)、前号で述べたように、「神武」が、事実上は「架空」の天皇であったがために、この第十代「崇神天皇」が、事実上の初代とされていることは、ある意味では当然である!「記紀」は、ここから現政権が始まっていると、自ら告白していることにもなる!ただし、ここで、改めて問題となるのは、明白に、神武一行と「出雲」との関係ということになる!何故なら、神武は、出雲神「事代主神」の「大物主神」の子「ヒメタタライスズヒメ」/「イスケヨリヒメ」と婚姻を結んでいるからである(九州に、先妻と子二人を残して?ただし、長子「手研耳(みぢみみ)命」は同行している!)

しかるに、ここで生まれたのが、長子「神人并耳命」(多氏始祖)、次子「神沼耳命」(緩踏天皇)とされている!要は、そこで、出雲勢力と手を結んだということであるが、そうなる、大和建國に当たっては、出雲勢力と在地勢力の関係、そして、そこから進出してきた神武一行(金縷は「万手族」とラニ族の混合勢力?)との、言わば絵画的(複雑?)な関係が、解き明かされなければならない!そういうことである!(つづく)(堂本)

〈特別コーナー〉堂本彰夫の古代史旅枕711

〇次に、「建國物語」を見てみる?その一

そこで、次に、実際に(3世積?)の、実質的な建國物語の真相を、改めて追究しておきたい!「記紀」の物語としては、神武が、九州から東征して来た時に、そこには既に、土地の豪族?「登美(長脛彦)と、彼の妹「炊屋姫」登美夜皇女を娶った「饒速日命」の勢力(物部一族)がいたという。ちなみに、その「饒速日命」の勢力(物部一族)が、ここからともなく「生駒山麓」の「峰ヶ峯(ひらね)」(交野市繁船(神社))に降臨し、その後天和に入ったともある!ある説によれば、彼らは、直接には「百備」から来たのではないかと推察されているが、(興裕)氏、しかもそれは、かの第十代「崇神天皇」に仮構されているが、もともとは、北部九州(厳密には「高良山」周辺?)からの進出だと考えられる!!

ところで、周知のように、その第十代「崇神天皇」は、不忠議にも、初代神武天皇とともに、「ハックニシラススメラミコト」(初めて国を治めた天皇)とされているが(ただし、表記漢字は違ふ)、前号で述べたように、「神武」が、事実上は「架空」の天皇であったがために、この第十代「崇神天皇」が、事実上の初代とされていることは、ある意味では当然である!「記紀」は、ここから現政権が始まっていると、自ら告白していることにもなる!ただし、ここで、改めて問題となるのは、明白に、神武一行と「出雲」との関係ということになる!何故なら、神武は、出雲神「事代主神」の「大物主神」の子「ヒメタタライスズヒメ」/「イスケヨリヒメ」と婚姻を結んでいるからである(九州に、先妻と子二人を残して?ただし、長子「手研耳(みぢみみ)命」は同行している!)

しかるに、ここで生まれたのが、長子「神人并耳命」(多氏始祖)、次子「神沼耳命」(緩踏天皇)とされている!要は、そこで、出雲勢力と手を結んだということであるが、そうなる、大和建國に当たっては、出雲勢力と在地勢力の関係、そして、そこから進出してきた神武一行(金縷は「万手族」とラニ族の混合勢力?)との、言わば絵画的(複雑?)な関係が、解き明かされなければならない!そういうことである!(つづく)(堂本)

〇何(ど)を、どのように見ていけばよいのか?

それは外交の 他方は教育のスタンスである!

何が幸せか? 選挙に託すはそれだが 結局決めるのは 一人ひとりの生き様?

何が幸せか? 選挙に託すはそれだが 結局決めるのは 一人ひとりの生き様?

何が幸せか? 選挙に託すはそれだが 結局決めるのは 一人ひとりの生き様?